

カラマツを用いたクリタケ原木栽培の収量

1 はじめに

昨年度の第 125 号でも、ご紹介したとおり、クリタケ（モエギタケ科クリタケ属）は、秋に広葉樹の枯木などに群生するきのこです。食味に優れ、古くから親しまれています。昭和 50 年代に長野県内でも原木栽培が開始されました。

シイタケのホダ木に用いられるコナラやクヌギ以外の雑木で栽培が可能です。また、針葉樹でも十分栽培が可能と種菌メーカーなどが紹介しています。

里山の再生や森林整備の気運を醸成するため、針葉樹でも子実体の発生可能なきのこは、間伐材の有効利用や森林に人を呼び戻す手段として活用の余地が大きいと考えられます。

これまでに、クリタケ栽培に長野県の主要な造林樹種であるカラマツを原木に用いた試験例も報告されています。しかし、収量調査の年数が 3 年程度と短く、主に市販品種が用いられているため、クリタケの栽培特性を全般的に考察する上では不十分でした。

そこで、クリタケ野生株を用いて、コナラ原木を対照としてカラマツ原木による栽培試験を行い、長期間に渡り収量を調査して栽培特性の把握を試みました。

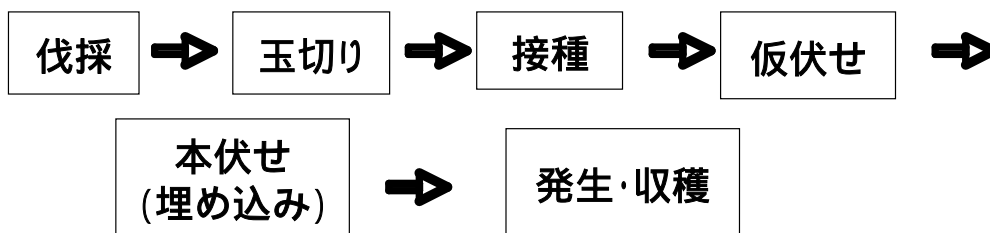
広葉樹原木の収量に対して、カラマツ原木が及ばないとしても、広葉樹を用いる場合と比較して、どの程度の割合かを把握しておくことは、カラマツの有効利用を図る基礎資料として重要です。切り捨て間伐をせざるを得ない場所でも、クリタケ菌をカラマツに接種することで一定の副産物が期待できるのみならず、材の早期の腐朽を図ることができます。

このような観点から行った、クリタケのカラマツ原木を用いた試験結果について紹介します。

2 試験の方法と結果

試験栽培の手順と概要は、図-1 に示したとおりです。

供試した 10 系統中 8 系統は、コナラ原木及びカラマツ原木の両者できのこが発生しました。コ



種菌：長さ18mm直径8mm（最大径）～6mm（最小径）の楔形ブナ材小片に培養。

接種：長さ1m直径10cm程度のカラマツ原木に各25箇所接種した（1999年4月）。1系統各6本。対照としてコナラ原木。

仮伏せ：人工ほだ場において1年間。

本伏せ：アカマツ・コナラ混交林内、各原木の直径1本分の間隔を空けて、横並べにして土壌中に埋設。

調査：子実体の発生調査を行い、2005年秋までの調査結果を集計。

図-1 試験栽培の手順と方法



写真-1 きのこの発生状況 (左)コナラ原木 (右)カラマツ原木

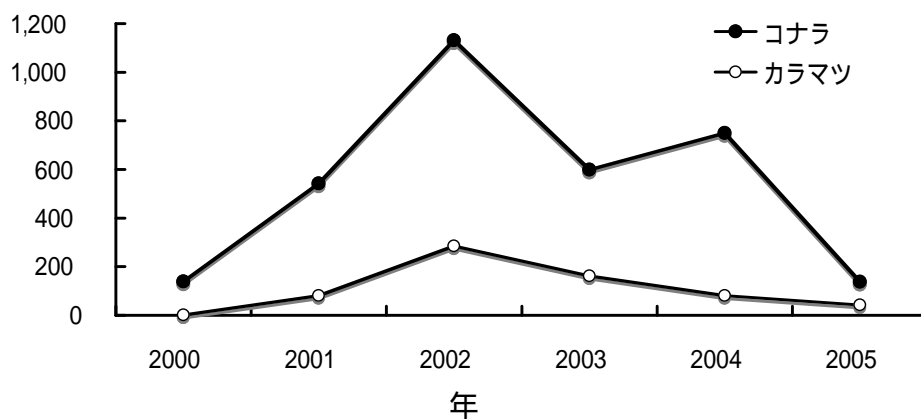


図-2 クリタケ野生株の原木栽培発生経過(10系統通算)

ナラ原木では発生しましたが、カラマツ原木では発生しなかった系統が1系統でした。また、コナラ原木及びカラマツ原木の両者できのこが発生しなかった系統が1系統ありました。

10系統のきのこの収量を合計して見ると、コナラ原木、カラマツ原木とも埋設後3年目の秋に収量が最大になり、累積収量においてカラマツ原木は、コナラ原木の20%程度の収量でした。カラマツ原木で最も収量の多かった系統では、コナラ原木に対しては23.9%の収量ですが、7年間の累積収量が原木1本当たり238.6gありました。

以上、クリタケ野生株10系統を用いて、コナラ原木を対照としてカラマツ原木で栽培試験を行った結果、カラマツ原木を用いたクリタケの栽培特性を把握するとともに、用いた野生株の中で最もカラマツ原木で収量のよかった1系統を育種素材として選抜できました。

3 おわりに

今回の検討の結果から、クリタケはカラマツ原木ではコナラ原木を用いた場合の20%程度のきのこの発生が見込めることが分かりました。

単にきのこ栽培としての経営を考えた場合、カラマツ原木では採算のとれる収量を得ることは困難と思われます。しかし、切り捨て間伐木を林内で有効利用する手段として考えた場合、簡易に菌が接種でき管理労力が小さければ、たとえ20%でもプラスアルファとして考えることができます。

このような森林整備を助ける手段として、把握した栽培特性や選抜した野生株を活用できると考えています。

(特産部 増野和彦)

- 《参考文献》
 技術情報 125 「クリタケ「ハナレ現象」の解明、2007
 技術情報 121 「きのこの簡易接種法」、2005